

十二遺跡における須恵器供給の問題

－須恵器胎土分析結果をふまえて－

御代田町教育委員会

堤 隆

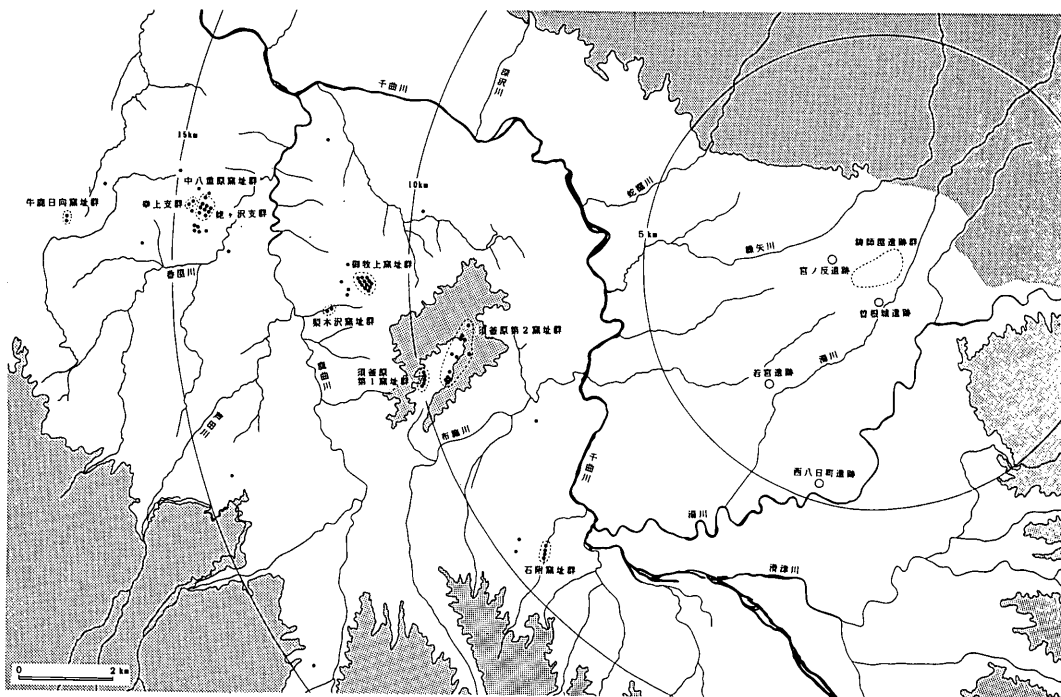
(1) 問題の所在

一地域において須恵器の供給はどのようなあり方をみせているか。

例えば一遺跡のある世紀ある段階において、在地の須恵器と外来の須恵器の供給がどのような割合をみせるかは、須恵器の流通を考えるうえでも解決されなければならない重要な課題でもある。

さて、佐久地方においては、御牧原・八重原台地において須恵器窯が集中して検出されており、^{(1) (2)}御牧原・八重原古窯址群としてとらえられている。ここでは、その東端に位置する佐久市石附窯⁽³⁾にみるように7世紀後半段階から須恵器生産がおこなわれていることが窺える。

それでは、この十二遺跡にみられる須恵器はいったいどこからのものなのだろうか。在地のものなのか外来のものなのか。また、その中に在地の窯から須恵器が供給されるようになるのはいつからで、それは須恵器全体のうちのどれだけの割合をしめしているのか。



第1図 御牧原・八重原における古窯址の分布 (※網点は標高800m以上の山地)

この問題を解決するために、奈良教育大学の三辻利一先生にお願いし、十二遺跡出土の須恵器の胎土分析を時期別におこない原産地推定を試みた。また一方で、その比較のための基準資料を用意する意味で在地窯の須恵器の胎土分析も試みた。その結果は付編 4 として掲載してある。

その分析結果から窺い知ることのできる、十二遺跡における須恵器供給の 2・3 の問題について考えてみたい。

(2) 在地窯の検討 ―御牧原・八重原古窯址群―

佐久地方における須恵器窯は、御牧原・八重原台地において集中して検出されており、御牧原・八重原古窯址群としてとらえられている。それはこの地域が須恵器を焼くうえで欠かせない良質な粘土を産出する地域だからでもある。また、望月牧の成立とも関与して須恵工人の移住があったのだろうか。

なお現段階では、佐久のこれ以外の地域には須恵器窯は認められていない。

第 1 図には御牧原・八重原台地における窯址の分布を、福島による調査研究成果⁽⁴⁾に基づいてプロットした。ざっと数えただけでも 50 基をゆうに超える古窯址の分布が認められる。例えば、御牧原台地では須釜原第 1 窯址群・須釜原第 2 窯址群・御牧上窯址群・梨木沢窯址群・石附窯址が、八重原台地では中八重原窯址群・牛鹿日向窯址群等がある。

年代的には、先に述べたように石附窯址が 7 世紀後半、須釜原第 1 窯址群のうちの 1 基が 8 世紀の所産としてとらえられるが、その以外は時期の判明するものについては 9 世紀以降の所産と考えられる。

さて、胎土分析に用いた試料は、御牧原古窯址群では御牧上窯址群 1 の須恵器 30 点・梨木沢窯址の須恵器 25 点、八重原古窯址群では中八重原窯址群幸上支群 1 の須恵器 30 点・中八重原窯址群姥ヶ沢支群 1 の須恵器 30 点である。これらの各須恵器の胎土はどのような化学的特性みせ、また、その化学的特性が相互に異なるかどうかをみるためである。もし、その化学的特性が相互に異なった場合、それぞれの窯址の製品を消費地において識別することも可能となるからである。

結果、胎土分析によって御牧原・八重原古窯址群の須恵器の化学的特性が明らかにされた。ただし、その相互の有意な差は認められず、相互識別が可能とはならなかった。

(3) 消費地での検討 ―十二遺跡の須恵器の産地―

胎土分析結果から推定される土器の産地については、付編 4 の第 2 表・第 16・17 図に掲載され

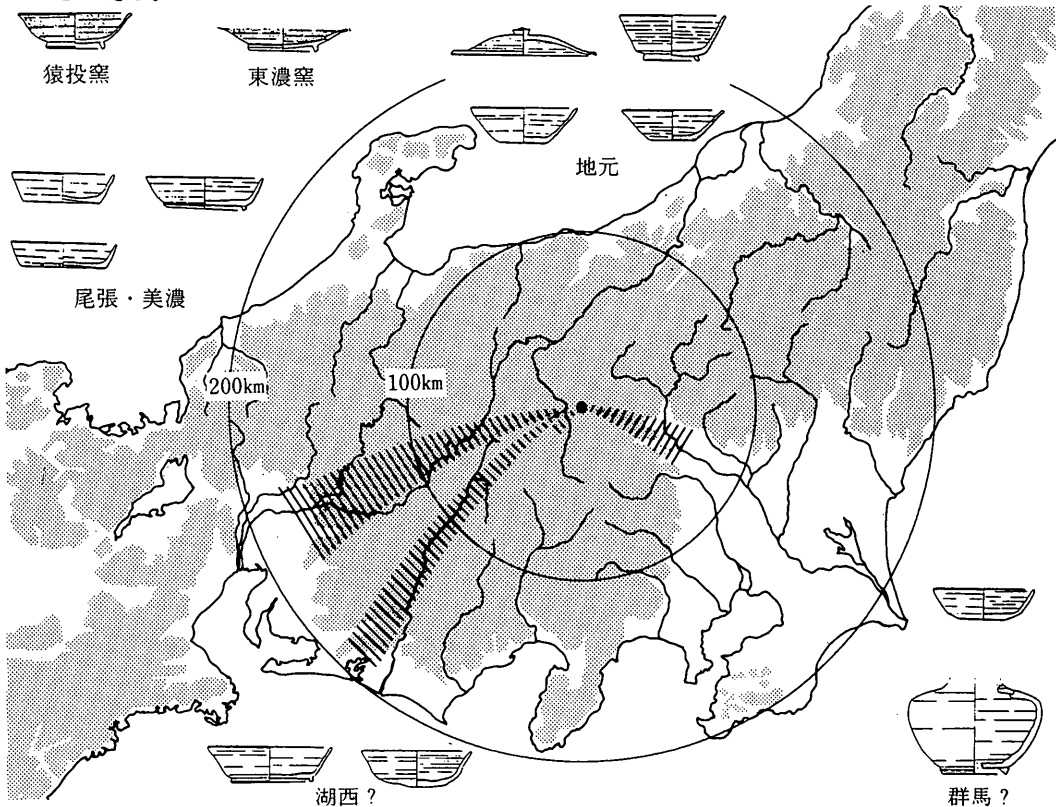
ている。その産地として、地元のほか、関東、群馬⁽⁵⁾、
尾張・美濃⁽⁶⁾・湖西⁽⁶⁾の古窯址が推定された。この結果を
世紀別にまとめると第1表のようになる。

これを大きく在地産・外地産の二者にわけて考えると、
以下のことが理解される。

- ① 八世紀前半では、在地産・外地産の須恵器の両者がみられるが、やや外地産のものに比重が大きい。
- ② 八世紀段階の古窯址は、在地では須釜原第1窯址群のうちの1基のみしか確認されていないが、胎土分析試料中に10点程八世紀の須恵器が存在することから類推すると、さらに八世紀代の窯が幾つか在地に存在したことが想定される。
- ③ 九世紀前半では、在地産の須恵器の認められる比重が大きくなっている。
- ④ ③の、九世紀前半では在地産の須恵器の認められる比重が大きくなっていることは、九世紀以降に御牧原・八重原古窯址群における須恵器生産が本格化することとよく符合するものといえる。

第1表 須恵器の産地（時期別）

産地 世紀	地 元	関 東	群 馬 ?	尾 張 ・ 美 濃	湖 西 ?
八世紀前半	6	1	3	8	2
八世紀後半	3			1	
九世紀前半	11	1		2	1
九世紀後半	1				
計	21	2	3	11	3



第2図 十二遺跡への須恵器等の搬入

(4) おわりに

胎土分析結果から推定される土器の産地から、十二遺跡における須恵器の供給の問題について考えてみた。

十二遺跡にあっては、八世紀前半段階にすでに在地窯からの須恵器の供給がなされており、九世紀前半以降ではほぼ在地窯からの一元的供給となることが想定されよう。

なお、本稿は十二遺跡における須恵器の胎土分析の成果によるものであるが、むすびの三辻利一先生の言葉によれば「胎土分析値からただちに原産地が判明するものではなく、分析値を如何に解説するかが問題」であり、また「全国各地のより多くの窯址出土須恵器の分析データ集積が胎土分析値完全解説につながる道である」という。この点において考古学の側からの惜しみない試料提供も重要で、考古学者と分析化学者の提携が必要となってくる。

また、考古学的な所見による推定産地と胎土分析値から判読される産地に矛盾が生じた場合、その矛盾点のクロスチェックが考古学者と分析化学者の間でなされればより精度の高い原産地同定につながるものであろう。ここにおいてまた考古学者と分析化学者の共同討議が重要ともなろう。

末筆となったが、膨大な試料の胎土分析を快くお引受けいただいた三辻利一先生、また、御牧原・八重原古窯址群についてご教示をいただいた望月町教育委員会福島邦男氏に厚く御礼申し上げる次第である。

註

- (1) 坂詰秀一 1982 「八重原窯跡」 (『長野県史 考古資料編 北東信』)
- (2) 福島邦男 1986 「御牧原・八重原台地における窯址研究の推移」 (『長野県考古学会誌』 51)
- (3) 林 幸彦 1982 「石附製炭窯跡」 (『長野県史 考古資料編 北東信』)
- (4) 前掲註(2)
- (5) 試料番号13の須恵器蓋は、胎土分析によれば尾張・美濃産と推定されたが、このような形態の須恵器蓋は尾張・美濃地域には現在のところ認められず、むしろその分布は埼玉・群馬に集中をみせている。これについては埼玉・群馬地域の産であることも推定される。
- (6) 試料番号12の須恵器凸帯付四耳壺は、胎土分析によれば湖西産?と推定された。
一方、笹沢によると、凸帯付四耳壺の分布はほぼ信濃に限られており、他地域では越後、北武蔵で僅かに認められるのみであるという。⁽⁷⁾湖西窯にはこのような器種は確認されていない。したがってこれについては、考古学的所見からは信濃産である可能性を考えておくことが妥当ではあるまいか。
- (7) 笹沢 浩 1986 「凸帯付四耳壺考」 (『長野県考古学会誌』 51)